

「創造性教育」で新しいものを生み出し 求める最良の人生をつかむ

昨年度、「第15回キャリア教育優良学校」に選ばれ、文部科学大臣表彰を受けた瀧野川女子学園中学高等学校。その受賞理由となった創造性と起業家精神を育む独自の「創造性教育」について、中心となって改革を推し進めてきた山口龍介副校長に話を伺った。

MBA教育で行っている ビジネスを展開させる

大学入試改革が行われた2021年度入試の総合型選抜で前年比4倍の合格実績をあげて以来、毎年12月までに8割の生徒を大学に合格させてきた瀧野川女子学園。その中には上智大学や東京理科大学など難関校も名を連ねてきた。「総合型選抜に強い高校」として実績を重ねつつある。「年内8割合格」を可能にしたのは、実は2010年から教育改革を始め、2015年から進めてきた「創造性教育」と「起業家精神の育成」を軸



副校長 山口 龍介 先生

とした、次世代のキャリア教育であり、その結果が2022年度キャリア教育優良学校としての文部科学大臣表彰につながったといえよう。同校の「創造性教育」は2010年に前身となる形を取り入れて以来、試行錯誤をしながら進め、今では中高6年間をかけて実施する必修授業となり、中1から段階的に、チームで世の中になにもを創出するための素地固めを行っている。

「MBAの教育で行っているようなビジネスを展開させて組み上げる手法を取り入れた『事業化実習』（高2）や、学んだプログラミング技術を使ったロボット製作（中2）など、自分たちで考えながら実際に手を使い、実践的に新しいモノを生み出すものです」と山口副校長は話す。

「従来の学校教育は、大学や実社会に出た時のビジネスから切り離されがちです。しかし、多くの若者が飛び込むのは、国の根幹を支え、雇用を

生む産業界です。だからこそ、そこで活躍するための教育を中高で始めたことは、とても意味があるのです」

女子校だからこそ 産業界で活躍できる教育を

ビジネスやプログラミング、ロボット製作など、女性の進出が少ない分野に注力する「創造性教育」について、山口副校長はよくこう質問されるといふ。「なぜ女子校で？」。だが、答えはいつも簡単だ。「女子校だからこそ」。

今、産業界では女性が少ないからこそ、その活躍が強く求められている。「たとえばキッチンやバス、トイレを家庭で一番メンテナンスしてきたのは、良し悪しは別として、これまでは圧倒的に女性が多かったですよ。ところが、その開発者は男性ばかりでした」

システムキッチンのシンクも「傾斜をつければ野菜くずが流れるのに」傾



2019年度から黒板に変わり導入された4Kモニターで、生徒のiPadと双方向の授業を展開

に入ってからすぐに活用できる。

「学生のまとめ役となって授業を手伝うことが多く、大学の先生に頼りにされているようです。また、就職活動も解禁と同時に内定をもらう生徒も多いですね。就職後も、入社2年目で大きな仕事を任されている話を聞きます。そんな卒業生たちから、事業化実習で学んだ経験が役立っていると聞くのはうれしいこと。今後、誰かが起業すると言いついたら、きっと『おもしろそう』と同窓生が集まってくるのではないのでしょうか。起業家精神といっても、専門性や特技は多様。会社を起こすフロントマンばかりではなく、それをバックアップすることが得意な人がいてもいいのです」

この「創造性教育」、および「起業家精神の育成」を支えるのは、単に6年間の「創造性教育」の正規カリキュラムだけではない。他校に先んじ



「大道芸ロボットを創ろう」では、人に優しいフレンドリーなロボットを工夫して作り上げる

など、キッチンを使う人なら誰でも気づくことが、長い間放置されてきたのも頷ける。

そもそも理工学部の場合、化学や建築以外は女子学生が少ないのは、どうしてなのだろうか。

「いつの間にか苦学意識が植え込まれたり、自分たちに関わるものだと知る機会が乏しかったりということもあるでしょう。しかし、小学校には理科や算数の好きな女の子はたくさんいます。ところが、中1と高1という節目に離れていくケースが多いのは、中1で中学数学が始まり、『これをやって何になるの?』となり、高1の数学Iで『つまらない』と、とどめが刺されるから。本校は、そこを変えたかったのです」

夢をかなえる道具と考える 理数系に忌避感情がない生徒

そこで力を発揮するのが、中1の「理想の街を創ろう」から始まる創造性教育だ。デザイン思考を用いて、

た圧倒的なICT化の力もある。それは、全教室に黒板がないという徹底ぶりからもわかる。

コロナ禍よりずっと以前、2016年度から生徒が一人一台のiPadを持ち、2019年度から教室には黒板に代わり、2枚の4K大画面のモニターを設置している。板書の無い授業のスピードは2倍速となり、スピード感のある双方向授業となり、授業後半はディスカッションに集中できる。また、授業でも課外活動でも、生徒同士の情報共有がオンラインによってスムーズだ。「ごきげんよう」とあいさつが飛び交う女子校らしい古風な風景と並行し、先端技術を使いこなして授業を進行する様子は何とも頼もしい限りだ。

「創造性や起業家精神、つまり世の中に向かって新しいものをチームで作っていくという考え方は、一生ものの財産です。結果として大学受験でも効果を上げていますが、人間としての大切な核となる部分を形作るのが中高6年間の時期です。私たちが提案する創造性教育をはじめとした、現実社会を見据えたキャリア教育に賛同いただけるのであれば、6年間、責任をもってお子さまをお預かりします。実りある楽しい6年間で共に過ごせればと思っておりますので、ぜひ挑戦してください」

アイデアを出し合い、みんなで理想の街について話し合い、最後はジョラマという形にする。

「コミュニケーション能力が高く、共同作業や意見のすり合わせが上手です。さくさくと話し合っていて、役割分担をして作り上げます。その延長線で、中2は『大道芸ロボット』を作ります。人を喜ばせることを目的としたロボットですが、人にフレンドリーなロボットは、研究者の間でも重要なテーマ。中1からプログラミングを学んでいるので、その技術を使って『あつたらしいな』と思うものを、自分で作れることを実感できます」

そうなる、自分のしたいことを実現するために何が必要か、数学や理科はやりたいことのための「道具」なのだと思つくといい。

「だから、本校の生徒には理数系への忌避感情がないのです。これが私たちのやりたかったことです」

そして、さらに高1の「商品企画コンペティション」、高2の「事業化



ハワイ大学チャリティバザーを主催。2022年には約28万円の寄付を実現

先端的なICT教育によって 黒板の無い教室を実現

こうやって身につけた力は、大学

